

日本における男女二元論的でない性表現のあり方
——X ジェンダー当事者たちの語りを通して——

小出ほのか

一橋大学大学院社会学研究科修士課程

2022 年 1 月提出

【論文要旨】

本論文は性別二元論から外れた X ジェンダー当事者の言語や服装による性表現のあり方を明らかにすることで、日本社会における二元論的でない性のあり方の現状を探らんとするものである。

現代社会において、身体と心の性は必ずしも一致しないという認識は広まりつつある。2003 年には特定の条件を満たす者に限定して戸籍上の性別の変更を認める性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律(以降「特例法」)が成立し、生まれた時に割り当てられた性別と本人が考える自身の性別とが同じではない人がいること、そして条件付きではあるものの、身体の性別ではなく本人が望む性で扱うべきということが法的に認められた。しかしながら、こうした特例法や性同一性障害の認知の浸透は、逆説的に性別二元論的な考え方を強化してきたとも言える。あくまでも性別は女性と男性のふたつであり、男女どちらにも当てはまらない性自認をもち、かつ必ずしも医療的措置を必要としない人たちの存在は見過ごされてきたと言っても過言ではない。

そのような二元論的でない性を包括する日本独自の用語である「X ジェンダー」は、Dale(2012)によると 1990 年代後半から存在するものである。しかし、X ジェンダーの性表現に焦点を当てた研究はほとんど存在せず、例えば日本語の表現は「女ことば」と「男ことば」の二つから検討されてきた。女性か男性かどちらかの言語資源しか用意されていない日本語(中村 2012)は諸外国語と比べても比較的に性差が強く表れる言語であり、比較的に性差が少ない英語を話すノンバイナリー当事者にとっては特に男女差がはっきり表れる一人称の選択に困難が生じる場合がある。Nakano(2016)が調査したノンバイナリーの Mathew は、自分の性自認に合う一人称として「俺」を女偏で中和した「俺」を生み出した。だが、これは日本語ネイティブ話者の少ない環境だからこそ成立した言語実践と考えられ、日本社会に住む当事者がどのように二元的な日本語を使用しているのかという視点が求められると言える。

そこで X ジェンダー当事者の自助団体である label X に所属する当事者 10 名に半構造化インタビューを行い、実際に X ジェンダー当事者がどのような性表現を行なっているのか調査することとした。また、一般の人が X ジェンダーやノンバイナリーという概念を初めて知るきっかけになると考えられるメディアでの二元的でない性の表象を分析し実態との差を考えることで、日本社会における二元的でない性の扱われ方を検討した。

第一章ではまず包括的な用語である「X ジェンダー」に対し、当事者達が抱く定義やイメージを検討するところから始めた。女性にも男性にも規定されない性という点で X ジェンダーは英語のノンバイナリーと非常に近いカテゴリであると考えられるが、X ジェンダーはノンバイナリーではないと明確に回答した対象者が複数いた。これはノンバイナリーが日本では性表現として扱われるケースがあり、本来の意味が浸透していない現状に起因すると考えられる。「X ジェンダー」に対しても「なんでもありな感じ」と自由なイメージを述べた対象者がいた一方で、ノンバイナリーよりも縛りがある印象を語った当事者もおり、当事者間でも定義やイメージの共通化がされていない実態が垣間見えた。

「X ジェンダー」以外のことばで自己を表現する当事者の語りにも見られたように、身体違和の強弱や目指す性のあり方にも共有されたイメージはなく、「X ジェンダー」という名乗りに対する姿勢にもバラつきが観測された。肯定的かつ積極的に X ジェンダーを自認する当事者がいた反面、完全に自己を同一化できないまま現在の自身に到達可能な身体や性という妥協として消極的に行われる名乗りが混在しているのである。「X ジェンダー」という用語が非常に多様な性を内包するため当事者の認識にも幅があり、それ故に居心地の良さを感じる当事者と、自分の性自認と周りの認識に差があって完全に合致する感覚を得られない当事者に分かれたものと推測される。一括りに「X ジェンダー」と言ってもさまざまな性のあり方が存在するのである。

これを踏まえて第二章では、当事者たちが言語やファッションを通してどのような性表現を行なっているかについて調査した。一般的にジェンダーニュートラルとされる「私」に対し、出生時の性が女性である FtX からは私的な場においては「私」使用に違和感を覚えるという複数の語りが述べられた。私的な場で他に使用される女性の自称詞がほとんど存在せず、見た目が女性的で自称詞も「私」だと完全な女性だと取られてしまうことが背景にあると考えられる。その違和感の落としどころとして、対面関係上では「私」を自称するが自意識内では「僕・俺」を使用するという非常に限られた場での言語実践が語られ、言語による性表現が相手を介さない場でも行われることが明らかとなった。ファッションに関しては、FtX 当事者が女性の服装の着用を「女装」として楽しんでいる語りが見られ、性別違和を抱える人が必ずしも出生時の性に沿った服装に嫌悪感を抱くわけではないことが判明した。性表現と性自認は絶対に一致するものではなく、女性的な格好をしている人が女性を自認しているとは限らないのである。

同時に、これら言語やファッションによる性表現は場や一緒にいる人との関わり合いによっても変化するものであり、一つの場で行われている性表現のみでその人のアイデンティティは規定されない。当事者コミュニティではスカートを履かないと語った FtX や、配偶者と身体変更はしないと約束している FtX など、場やパートナーの存在が自由な性表現の妨げになる場合もある。家では家族がいるため自由に性表現を行えない人が職場では性自認に沿った服装をしていたり、社会的には女性として生きている当事者がコスプレで男装することで自身の性のあり方のバランスを取っていたりするのである。「X ジェンダー」

として固定された確固たる唯一のアイデンティティだけを基盤とした性表現が行われているのではないため、“X ジェンダーの性表現”と一つにまとめられるようなものではなかった。

三章ではメディアにおける二元論的でない性の表象について分析した。近年ハリウッド映像作品にはノンバイナリー設定の登場人物が現れるようになってきているが、そのセリフが日本語に訳される際、演じる役者の出生時の性や外見から推定される性を元に女性的な表現が使用される場合がある。字幕と吹き替えで訳し方が違うケースすらあり、これら日本語訳には訳者のジェンダー規範や言語イデオロギーが表れていると考えられる。そのような翻訳はノンバイナリー表象の不可視化を促していると言え、二章で得られた当事者による言語実践のあり方とはかけ離れた翻訳の実態も含めて X ジェンダー当事者から批判の声が上がった。

次に、日本独自のカテゴリである「ジェンダーレス」についても分析を行なった。女性でも男性でもない性の表象の一つとしてメディアに取り上げられることが増えてきたジェンダーレスだが、X ジェンダー当事者の中に自身をジェンダーレスだと思いと回答した人は一人もいなかった。本来は“ジェンダーがない”を意味することばではあるものの、実際は容姿の美しい人が中性的な服装をする場合の性表現として使われることが多く、ファッション用語と捉えているため自分は当てはまらないと考えている当事者がほとんどだったという結果である。同時に、二元的でない性が美しさと結びつけられることで、それらの名乗りが難しくなってしまう可能性も示唆された。一方で近年はジェンダーレスが性自認と絡めて使用されることもあり、そのような性表現と性自認が混同されている現状を受けて、「ジェンダーレス」と言われたら不快感を覚えるかもしれないと語った当事者もいた。

最後に終章ではここまで得られた知見を提示する。まず X ジェンダーには一般に想定される中性だけでなく様々な性のあり方が混在しており、それ故になにか一つ確固たる目標や定義が共有されることは難しい実態が明らかとなった。次に、その性の多様性から性表現の方法も多種多様であり、メディアにおける表象はそれを表現しきれていない現状にあると言える。本研究の限界としては、当事者へのアクセスが容易ではなかったために、例えば同性のパートナーがいる当事者やより若い年齢層への調査ができなかったことが挙げられた。

【主要な参考文献】

Dale, S.P.F., An Introduction to X-Jendā: Examining a New Gender Identity in Japan(2012). *Intersections: Gender and Sexuality in Asia and the Pacific* Issue 31. pp.1-17

Nakano, Takumi, Japanese Pronoun Adventure: a Japanese Language Learner's Exploration of His Japanese Gender Pronoun (2016). *Masters Theses* 438. pp.1-68

中村桃子(2012)『女ことばと日本語』岩波書店